

1930年代日本文學における「野蛮」への共鳴をめぐって

－ 大鹿卓『野蛮人』・谷崎潤一郎『武州公秘話』・山部歌津子
『蕃人ライサ』を中心に －

垂水千恵*

I. はじめに

津島佑子『あまりに野蛮な』(2008)の刊行は台湾文学研究者にとって、一つの「事件」だったと言ってよいかもしれない¹⁾。津島は執筆の核心に1930年10月27日に起こった霧社事件への関心があったことを次のように語っている²⁾。

あるうわさ話を聞き知ったとき、そう気がつかされた。国益のため、それとも私益のため、異文化の世界を一方向的に「野蛮」だとして、自分たちの文化で押しえつ

* 横浜国立大学。

- 1) 津島佑子『あまりに野蛮な(上)(下)』講談社、2008。なお、本稿執筆に当たっては「日本台湾学会設立10周年記念学術大会」2008.5.31-6.1における第1分科会企画「文学から見た台湾の記憶/記憶の台湾—1930年代を中心に」(企画責任者：李文如、座長：呉佩珍)にコメンテーターとして参加した際の、さらには台湾国立成功大学主宰「日本殖民主義与文化工作坊」2009.9.21に報告者として参加した際の諸報告および議論に啓発された点が大きい。この場を借りて関係者各位に謝意を表す。
- 2) 霧社事件とは1930年10月27日、台湾原住民族セテック族の6つの部落が、大規模な抗日蜂起を起こし、これにより日本人134人が殺害されることに端を発した事件である。この蜂起に対して日本植民地政府は軍および警察により討伐を行い、原住民族644人が死亡した。さらには事件の生存者を収容する「保護蕃収容所」を敵対する部落が襲撃し、216名が殺害されるなど、「台湾史上において、心の痛みを呼び起こす大きな悲劇」である。呉密察「霧社事件研究の課題」『日本台湾学会報』第12号、2010.5、pp.21-27。

けようとする状態、それは今現在もつついていることではなかったか、と。…野蛮なうわさ話…ここには植民地時代に起きた、台湾の山に住む一部の原住民による蜂起「霧社事件」で、日本人が多数殺傷されたという遠い記憶が働いている。…「植民地」という状態もどうやら宗主国側にとっては、性的な強迫観念と深く結びついているらしい³⁾。

ミーチャ(叔母)とリーリー(姪)という二世代の登場人物をめぐる物語が、1931~35夏と2005年夏の二つの時間軸に沿って展開する同作は、従来の「霧社もの」と違い、霧社事件そのものを描いたり、霧社事件の真相を突き止めようとする作品ではない。しかし、津島佑子という現代日本文学を代表する作家が、それに喚起され、700頁あまりの大長編小説を書いた、ということの意味は大きい。霧社事件の一体何が、80年近い時を経て今なお文学者を刺激するのだろうか?河原功は「日本文学に現れた霧社蜂起事件」の中で、霧社事件および原住民族を描いた文学作品をリストアップし、それらの創作動機について「少数民族としての高山族の持つ特異性(いわゆる異質な風俗、習慣、文化などを有する野蛮で未開な民族だという固定観念を日本人は持っているということ)に引きつけられ、加えて台湾への郷愁や憧憬がそこに介在して書かれてきた傾向」を指摘している⁴⁾。確かに、霧社事件への関心の核心に原住民族の存在があることは否定できない事実であろう。若手の台湾文学研究者である楊智景は51年に及ぶ台湾統治期を全貌した力作『日本領有期の台湾表象考察—近代日本における植民地表象—』において、領台初期から「新領地台湾を表現するにあたっては、野蛮、未開のイメージが常に前面に出され」「台湾原住民族とそのようなイメージとはほぼワンセットのように直結されている傾向」を指摘、「植民地台湾を表象する際に必ず語られる原住民族が、植民地台湾に対する野蛮未開の想像を可視化するための触媒として機能させられていた」と指摘している⁵⁾。

3) 津島佑子「『野蛮』の意味」『本』、2009.1, pp.7-9。

4) 河原功「日本文学に現れた霧社蜂起事件」河原功『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点』研文出版、1997, pp.69-105。初出は戴国輝『台湾霧社蜂起事件—研究と資料』社会思想社、1981。戦後の関連文献については北村嘉恵「霧社事件関連文献目録」『教育史・比較教育論考』第20号、2010.6, p.74参照。

5) 楊智景『日本領有記の台湾表象考察—近代日本における植民地表象』お茶の水女子大学大学院

津島の場合もそのタイトルが端的に示すように、「野蛮」と台湾原住民族表象を重ねる姿勢は明らかである。ただ、津島の場合は「子どもの時から私は」「おまえは野蛮だ」といわれていたんです。…ここまで生きてきたら、もうそろそろ、胸を張って「私は野蛮です」と言い残したくなった、それがこの題名を選んだ一つとしてあるんです⁶⁾という発言が示すように、決して「野蛮」＝「原住民族」を否定的な意味で使っているのではない。作品においても台北帝国大学講師の夫から「未開の蛮人みたい」(上162)、「粗野」(上220)、「蛮勇」(上232)と存在を否定された女主人公は、「自分の領分を失なったミーチャは、モーナ・ルーダオに身を寄せずにいられなかった」(上342)と原住民族に共鳴して行くのである。

それはまさに呉佩珍が指摘するように、「(霧社事件は)ミーチャにとって近代国民国家と共犯関係をもつ「文明化」のもとに自分と同じように抑圧、ないし抹消される象徴となるのである。そこには「霧社事件」、そして「植民地台湾」の記憶がそれぞれの女性と台湾の関わり方によって再編成されていくものとなる」「霧社事件」を女性の目から捉えなおしたとき、いままで日本と台湾が持っていたそれぞれ異なる「台湾植民地像」は、実際にオーバーラップしているという可能性が浮上してきた⁷⁾ことを示すものであろう。

しかし、果たしてこうした「野蛮」への共鳴は、戦前の日本人作家によって描かれることはなかったのであろうか？ 本稿では1930年代に描かれた3作品、大鹿卓『野蛮人』・谷崎潤一郎『武州公秘話』・山部歌津子『蕃人ライサ』を取り上げることによって、むしろ日本文学は「野蛮」への共鳴を語ることで作品を生んできたのではないか、という問題について論じて見たいと思う。

人間文化研究科国際日本学専攻学位論文、2008.3、p.178。

6) 津島佑子・堀江敏幸「対談 野蛮からはじまる」『群像』64巻2号、2009.2、pp.150-162。

7) 呉佩珍「なぜ、今、女性作家は三〇年代を書くのか？—日台女性作家による植民地台湾の記憶の再編成」『日本台湾学会設立10周年記念 第10回学術大会報告者論文集』2008。

II. 大鹿卓「野蛮人」(1935)

「野蛮」への共鳴ということ正面から描いた作品としては、まず大鹿卓「野蛮人」(1935)を忘れてはならないだろう。1920年に起こったサラマオ蕃事件を背景として書かれた同作は、1935年2月『中央公論』に懸賞当選作品として掲載された後、1936年11月に刊行された創作集『野蛮人』にも収録されている⁸⁾。まずは簡単にストーリーをまとめておこう。主人公の田沢は父の所有する筑豊炭鉱の争議に参加、父の怒りを買って、台湾行を命じられ、父の旧友である蕃務課長井野の紹介で、霧社の白(はっ)狗(く)駐在所の警備員になる。やがてサラマオ蕃討伐に参加した田沢は、打倒した原住民族の首を打ち落とす。首を挙げた田沢は原住民族の尊敬を集め、もともと田沢に好意を示していたタイモリカルもますます積極的に迫る。タイモリカルに関心を抱きながら行動に踏み切れないでいた田沢だが、同僚の荒木が結婚を申し込んだという話に刺激を受け、ついにタイモリカルと関係を持つ。蕃社に彼女の父親を訪ねた田沢は、蕃社に住む意思を告げ、蕃布を身につけ、鍋墨で刺青を描く。田沢は、周囲の興奮に「おれも野蛮人だ、負けはしないぞ」と自らも興奮しながら、「檻に入れられた野獣のやうに右往左往」するのだった。

さて、「野蛮人」においては主として二種類の「野蛮」への共鳴が描かれている。一つは「馘首」を頂点とする戦闘への衝動である。「私は命を脅かされてゐるやうな時の方が、生きがひを感じます。負け惜しみぢやない、私はそんな性分なんです。ですから、たいがいの野蛮には負かされなかつもりです」(p.6)と語る田沢は、討伐

8) 大鹿卓『野蛮人』葉林書房、1936。但し、引用に際しては河原功監修『日本植民地文学精選集[台湾編]6 大鹿卓 野蛮人』ゆまに書房、2000を使用した。この懸賞当選とは『中央公論』誌が1934年8月号において創刊50周年を記念して行った創作原稿の募集であり、賞金は1000円、締め切りは10月31日であった。『中央公論』では1934年1月にも大々的な原稿募集を行っており(この時の当選作は島木健作「盲目」、平川虎臣「生き甲斐の問題」、石川鈴子「無風帯」、丹羽文雄「贅肉」、選外佳作8編には中島敦の「虎狩」が含まれている)、1934年8月の募集はその第2弾とも言えるものであった。1935年1月『新年号』によればこの時の当選作は大鹿および頼田島二郎の「待選駅」であったが、さらに台湾人作家張文環の「父の顔」も「選外佳作」として選ばれていた。台湾からは小説2、評論4、中間読み物3、合計9作品の応募が、さらに朝鮮からは小説44を含む64作品、満州からは小説19を含む33作品の応募があったことが記録にある。「新人号応募作品地方別表」『中央公論臨時増刊新人号』1934.7、pp.220-221。

隊の姿に「血が騒いだ」(p.14)り、首のない死体があったという報告に「犠牲者には申し訳ないことだが、私も現場を見たかったなア」(p.15)という反応を示す。さらに討伐隊に加わった田沢は「一人きりになると田沢も興奮のあとの底知れぬ寂寥に襲はれた。彼もふらふら歩きだした。だが、先刻自分が撃ち倒した死体の一步手前へまでくると、すくむやうに足がとまつた。数分の間、彼はちつとそれを見下ろしてゐた。と、突然野獣のすばやさで彼は森林のなかへひき返し」(p.23)、その首を切るのである。

1936年刊行の巢林書房版『野蛮人』ではこの馘首の描写部分は伏字が多いので、1949年刊行の白鳳書院版『野蛮人』も加えて田沢の心情を追うならば、「彼は何ものか憑つたやう」(p.23。太字ゴシックは巢林版伏字部分、以下同様)に首を落とすが、「狂暴な動作にとりすがつてゐた彼は、ただ急に気がゆるんでふきだす激情に負け」涙を流す。が、「彼にはまだ悔恨は襲ひかかつてゐなかつた。兇行をやつてのけたといふ実感さへなかつた」(p.24)と描かれている。しかし、しばらくたつと「夕方蕃人の首を打ち落とした記憶のデテエルが、責道具のやうに迫つてきて彼をさいなんだ。あの兇暴な行為がどんな意味で、重大な汚点を自分へのこしたかといふことを知らされ、彼ははじめて痛恨の時をすごした」(p.26)と心情は変化する。ただ、その「痛恨」が道徳的なものであるとは示されない。むしろ「この分だと今後どこまでこの首が、おれにつき纏ふかしれんぞ、こいつは悪運を背負つちやつたやうなもんだ。それならそれで覚悟をきめてやれ」(p.28)と、文明側に引き返せなくなることへの悔恨であり、また悔恨を感じる自分に対し、「彼は打ちのめされたやうに自分の精神のひ弱さを知つた」(p.29) 自己批判めいた気持を持つ。

「移植されたばかりの貧弱な木にすぎない」(p.30)自分に対して、原住民族の「野蛮性は、例えば大自然の無慈悲さに虐げられながら、又その馘い慈悲に息づきながら胸を拡げている大樹の、その不逞な精神に通じてゐる脈動」である、として、原住民族の「馘首」という「野蛮性」を「不逞な精神」として肯定するのである。

もう一つ描かれてる「野蛮」は、女性への征服慾である。「タイモリカルへの関心」を持つ自分に「未だ純真な心がのこつてゐたのだと爽々しい気持ち」になり、「おれが彼女を恐れるのは、自分の野蛮性がまだ中途半端だからだ」「野蛮になれ！」(p.32)と考えたり、自分が積極的になれないのはタイモリカルの野蛮

性が足りないからだと考えていた田沢も、同僚の荒木に彼女を奪われそうになった途端、「悩ましい衝動が、胸に痛くつきあげて」(p.50)きて、タイモリカルと関係を持つ。そしてそのことに対して、「大飛躍をしたやうに自負」と「自分の生活が一躍野蛮の方に動き出したといふ期待」(p.51)を持つのである。田沢は「タイモリカルをさらに本来のはげしい野性に返らせ、その息ぶきのなかで咽てみたい」(p.54)と望み、「勇猛な動物の尊い生活力が彼女にのりうつるのだ」「人間だけが尊いものを所有してゐると思ひ込むのは間違ひだ」と思った瞬間、「彼自身もまた、動物的に蘇へるのを予感し」(p.56)、再び彼女と関係を持つ。そして、「肉体と精神を分けて考へなくなつた自分を、やうやくほんとうの野蛮を呼吸した証拠だと自負」(p.56)するのである。

興味深いことは、「野蛮人」におけるこの二種類の「野蛮」への共鳴：馘首と女性への征服慾を描いた場面がいずれも部分的に伏字になっていることである⁹⁾。つまり、大鹿の「野蛮」への指向は十分に反社会的要素を含みもったのであったといえるだろう。河原は同作は「むしろ平然と高山族虐殺を繰り返してきた日本人こそ野蛮人の名にふさわしいとする、大鹿卓の告発であった」と論じている¹⁰⁾。作品集『野蛮人』が台湾で禁書扱いであったことも含め、そうした植民地批判的な要素は否定できない。ただ、大鹿の「野蛮」への共鳴が、もっと内的な衝動を感じさせるものである点に、もっと着目してみよう。

レイ・チョウは『プリミティヴへの情熱』¹¹⁾のなかで7点にわたってプリミティヴへの情熱の定式化を行っており、その第一および第二点として、プリミティヴなものへの関心は文化的危機の瞬間—伝統的文化記号がその優位性を奪われるときに現れる。そして優勢だった伝統文化の記号が意味生成を独占できなくなった時、動物、野蛮人、といった起源への幻想が生まれる、という興味深い指摘をしている。この指摘を受けて「野蛮人」を読んだ場合、気になるのは、田沢が炭鉱争議に参加したことで、父から勘当を受けた身である、という設定である。「東京の遊学をしくじつて帰省してみた」田沢は、「八幡から争議に來援した

9) 後者の伏字箇所は「彼は体と体をぶつけ合した。二つの体は、切り捨てられて咽るやうな樹液のほひを噴きだしてゐる枝葉のなかへ転つた」(p.56)の太字ゴシック部分である。

10) 前掲、河原功、p.84。

11) レイ・チョウ(本橋哲也・吉原ゆかり訳)『プリミティヴへの情熱』青土社、1999、p.44。

某組合の小宮の面貌に接すると、その場で争議団の一員として働くことを契ったが、父の抗議を受けた小宮に「裏切られた」ことにより「たへがたい打撃」を受け、「自棄的に」「何度目かの勘当のかはりに」「蕃地」にやってきた、とされている(p.4)。つまり、田沢は伝統的父子関係の中で継承していくべきアイデンティティを失った存在であると言えるだろう。彼はそうした危機を回避すべく、小宮一井野といった疑似父性を求めては満たされず、最後にたどりついたのがタイモリカルの父である老頭目のイバンタイモという強い男性性を持つ父性であった。田沢はイバンタイモに「よい婿をもつた」と手を握られ、「今度の猟のときはぜひ連れていく」と言われたことで、「蕃社の男達にまじって狩猟にでる想像に、強くこころを打れ」(p.57)る。つまり、田沢の「野蛮」への共鳴は、「馘首」を行い、「蕃婦」と交わることで蕃社の「男」、老頭目のイバンタイモの「息子」としてのアイデンティティを再獲得したい、という希求によるものであり、その希求こそが「野蛮人」というこの作品を支える原動力だったと言えるだろう。

Ⅲ. 谷崎潤一郎『武州公秘話』(1935)

次に取り上げて見たい作品は谷崎潤一郎『武州公秘話』(1935)である—と書けば、果たして『武州公秘話』に台湾など出てきたのだろうか?と首をひねる向きは多いだろう。しかし、同作が1931年10-11月、32年1-2月、4-11月に雑誌『新青年』に掲載された後、1935年、中央公論社から刊行されたことを思い起こしてみよう。果たして、霧社事件の翌年に「首」をテーマとした作品が執筆されたことは、単なる偶然なのだろうか?もちろん谷崎自身の回想、書簡などからこの二つの関連を実証することはできない¹²⁾。しかし当然のことながら1930年10月27日に起こった霧社事件はすぐに日本でも大きく報道された。

12) 「年譜」(『谷崎潤一郎全集 第二十六巻』中央公論社、1983、pp.303-332)に拠れば、谷崎は1925年10月には佐藤春夫と和解、30年8月には春夫と連名での千代譲渡の書状を出している。一方、春夫は1920年3月の谷崎との絶交以降、同年6-9月頃台湾を旅行し、断続的に台湾に素材を取った作品を発表。1925年3月の『改造』には「霧社」を発表している。和解以降の両者が台湾を話題にしたこともあり得たのではないだろうか。

例えば『東京朝日新聞』は事件の起こった翌々日の1930年10月29日(夕刊)1面に
 おいて、「台中州の蛮人暴動 駐在所多数襲撃される」との第一報を報じている。こ
 れは27日午後10時15分に陸軍省が着電した台湾軍司令部発の第1報に基づくも
 のである。以後、11月12日まで連日にわたって、その後も断続的に報道が続け
 られた¹³⁾。1930年には3-9月にわたって「乱菊物語」を同紙に掲載していた谷崎が、
 これら一連の報道を目にしていなるとは考えられない¹⁴⁾。

あまつさえ『東京朝日新聞』では11日1日から11日まで8回にわたって「蛮人物語」
 と題したコラムを連載するなど、いわば物語的関心を以て同事件を報道していた。
 この「蛮人物語」の執筆者については不明だが、大きな事件の直後の連載だけに谷
 崎のもならず多くの日本人読者が目にし、その後の原住民族観に影響した可能性は
 大きい。「蛮人物語(一)」(1930.11.1)は「日本人と同種族!それが彼等の持つ誇り 洗つ
 ても落ちぬ兇暴性」として、「彼等が蛮人であること即ち蛮人としての特性が、今度
 の暴挙の一因であつた」とし、その証拠として「四国土佐の人で蛮人布教のために入
 山した僧りよ」が、「教化」に成功し、七八年も生活を共にした後、帰国しようとし
 た朝に首を切られた、というエピソードを紹介している。さらに同様に、やはり齧
 首された小学校教師のエピソードも紹介することで、蛮人一兇暴性—齧首、という
 印象を強めている。さらに「蛮人物語(三)」(1930.11.4)では「頭までたら一大事 親し
 いあいさつは胸をつく、夢のお告げで首斬り出征」、「蛮人物語(四)」(1930.11.5)で
 も「流行病を恐怖して、高い山へ逃れゆく蛮人 首斬りは男の中の男」、という風に
 齧首の習慣が大きな関心の的となっていることが見て取れる。こうして形成され
 ていく言説が、どこかで谷崎を刺激し、『武州公秘話』を生んだ可能性も否定はで
 きまい。

「最後にそれらの首は三人の女のうしろにある長い大きな板の上へ一列に並べ
 られた。首がすべり落ちないやうに、その板の表面には釘が出てゐて、それを首
 へぎゆうと突き刺す仕掛けになつてゐた」「木の札に紐をつけて、それを首の髻に

13) 『朝日新聞検索システム 聞蔵Ⅱビジュアル』を「霧社」というキーワードで検索すると、11月12
 日までの段階で99件、11月末までで117件の記事がヒットする。

14) 「年譜」『谷崎潤一郎全集』第二六巻、中央公論、1983、p.318。但し引用に際しては1986年の再
 版を使用。頁も同版に拠る。

結ひつけてゐるのだが、たまたま髪が生えてゐない首、一「入道首」が廻つて来ると、錐で耳に穴を開けて、紐を通してゐた」—もしこれら一連の動作の主語が原住民族であったなら、まさに「洗つても落ちぬ兇暴性」の証拠として喧伝されるか、或いは大鹿のように伏字となつたはずである。しかし、それが谷崎のエクリチュールにおかれた瞬間、伏字という政治的介入を受けることもなく、「残酷さ」は「顔もその手と同じやうに美しかつた」と美へと昇華していく不可思議さ¹⁵⁾—その意味において、谷崎自身が意識していたかどうかに関わらず、『武州公秘話』は「野蛮」をめぐる言説の政治性を告発する、挑発的なテキストたり得ているのである。

IV. 山部歌津子『蕃人ライサ』(1931)

最後に取り上げたい作品は山部歌津子『蕃人ライサ』(1931)である。1931年1月に東京の銀座書房から刊行された同書には霧社事件を思わせる記述もあり、もっと注目されていい作品であるが、作者「山部歌津子」が誰であるかが特定されていないこともあり、先行研究が少ないのが現状である¹⁶⁾。

まず、その内容を簡単に紹介しておこう。主たる登場人物は原住民族の青年巡査補ライサと、その理解者であり樟脳会社に勤務する田中正次である。ライサは「蕃童学校を、良い成績で卒業した」「日本語がよくわかる」(p.2)青年であり、巡査補に就任した際は「一層忠実な働きをして、上られるだけの路を上り詰めなければならない」(p.18)と思う、十分に「皇化」された存在として描かれている。ライサは部族の頭目である父タイモ・ワタンから「蕃人の習慣である刺青」

15) 谷崎潤一郎『武州公秘話』『谷崎潤一郎全集 第十三巻』中央公論社、1982、pp.206-207。なお、この引用箇所が初出の『新青年』1931年11月号、pp.68-69でも伏字になっていないことに關しては帝塚山学院大学教授宮内淳子氏のご教示を受けた。ここに記して謝意とする。

16) 管見の及ぶところでは、前掲、河原功の1997、pp.87-89に若干の言及があるほか、下村作次郎「山部歌津子『蕃人ライサ』解説」河原功監修『日本植民地文学精選集【台湾編】4 山部歌津子『蕃人ライサ』東京：ゆまに書房、2000、pp.1-8。李文如「日本人と「蕃人」とのコロニアル・エンカウンター—山部歌津子の『蕃人ライサ』をめぐって」『表現と創造』6、2005.3、pp.27-44、が主たる先行研究である。なお、本稿ではテキストとしてゆまに書房版を使用、引用頁も同書に拠る。

を入れて、結婚するように言われているが、「刺青を、彼はこゝろよしと」せず、悩んでいる。そこにライサを日本人と結婚させようという計画が日本人の役人たちの間で持ち上がる。しかし、その相手はシベリアお六という元娼婦であった。互いに詳細を知らされないまま見合いの酒宴に同席した二人であったが、「いかに落ちぶれてもあたしアまだ生蕃のお嫁さんにやなりませんよ」(p.42)というお六の言葉に怒ったライサはその場を飛び出す。その後は、田中のとりなしもあり、お六と和解し、また樟脳会社の鈴木主任の娘とみ子の昆虫学研究の手伝いをしながら平穏な日々を送っていたライサであったが、やがて台湾特産品を明治神宮に献納する特使一行として上京することになる。しかし一方では、鈴木横領の端を発した不満がライサの生れたカラパイ蕃社において高まる。そんな中、ライサが台北で事故にあったという噂が誇大に伝わり、いよいよカラパイ蕃社の反乱が起こる。そしてカラパイ蕃社への不満を鎮めようと私財を投じる相談をしていた田中と、鈴木夫人が真っ先にその犠牲になってしまったのだ。

『蕃人ライサ』において着目したい点は、田中の口を通して「(カラパイ蕃の)創世記の精神が今に彼等の間に強く残つてゐるから、彼等の貞操観念が、羨ましいほど強いのであらう。此の点は吾々内地人も彼等を手本としなければならない」(p.7)、と原住民族の道徳観が高く評価されている点、さらには主人公ライサが「読書と実験に没頭」(p.93)し、「化学の実験だけは私たち生蕃の若者がやつても、大学教授の博士がやつても、ちつとも違はない結果が現れるんですもの」(p.94)と述べる近代的思考を持った青年として描かれている点である。そして、その両者は「文明人の頭脳と蕃人の信仰、肉体を以てこの台湾の原始林中に君の天地を創造するんだ」(p.73)という期待を受け、「人に次第に愛されて行つた。しかしそれは決して家畜として、奴僕としての軽く踏まれて親しまれる愛ではなく、一人の人としての魅力だつた。熱心な真摯な青年としての敬愛であつた」(p.102)というライサ像へと結実していく。その意味において、『蕃人ライサ』は従来とは全く違った「蕃人」像が描かれた作品と言ってよいだろう¹⁷⁾。そして、その

17) 李文如は前掲論文において、同作が「日本」＝「文明国」／「蕃人」＝「野蛮な種族」といった、両者の絶対的な関係を解体しようとする異色の作品である、と高く評価している。一方で下村作次郎は、前掲「解説」で「作者の台湾原住民に対する理解や同情は、必ずしも十分とは言えな

新しさは作者の存在とも不可分に結びついているはずだが、一体「山部歌津子」とは誰なのであろうか？

下村は同書解説において「献辞」および「はしがき」を手掛かりに精力的に調査した結果、「岡部節子」という人物のペンネームであるらしいことまでは突き止めたが、「では、「岡部節子」とはいかなる人であろうか。残念ながら依然として謎のままである」と結論付けている¹⁸⁾。綿密な実証で知られる下村の調査にも関わらず判明しなかった山部歌津子(岡部節子)であるが、果たして彼女は実在の人物なのだろうか？下村の言及する同書の「献辞」には、「此の一書を謹んで「闇を貫く」の作者沖野岩三郎氏に献ず 昭和六年春 著者」、さらにその沖野岩三郎による「はしがき」には、「「闇を貫く」のヒロイン山部歌津子さんが訪ねて来て、大部な原稿を示された。手に取つて三枚五枚と読んで行くうちに、私はすっかり釣り込まれて、たうたう最後まで、息もつかずに読まされてしまった」と書かれている。これは架空の作者を語る沖野岩三郎の「仕掛け」と読めないだろうか？紀貫之『土佐日記』に始まり、著名な男性作家が女性を装って著作を発表する例は少なからずある。『カルメン』の作者メリメ(Prosper Merimee, 1803-70)が処女作『クララ・ガスの戯曲』(1825)を、スペイン女優の作品と翻訳と称し、女装した自分の肖像画をつけた、というエピソードなどはその典型であろう¹⁹⁾。そういう目で、この「献辞」および「はしがき」を読むと、如何にもその謎を解いてくれと言わんばかりの筆致の思われて仕方がない。しかも、『蕃人ライサ』には沖野岩三郎だからこそ書き得ると思われる内容を多く含んでいるのである。

い。作者自身はおそらく台湾の山地に足を踏み入れたことがなかったのではないか」「モーナ・ルーダオを想わせるような老頭目タイモ・ワタンの息子ライサが、事件後、売春婦のシベリアお六と樟脳会社の鈴木主任令嬢とみ子の三人で一緒に生活をはじめるといった結末は、井上伊之助が『生蕃記』で見た台湾原住民に対する深い理解とは甚だ遠いものがある。こうした結末はあまりにも人道主義的であり、理想主義的であると指摘せざるを得ない」と厳しい評価を下している。但し、井上自身がライサ像を評価している点は後述の通りである。

18) 前掲、下村作次郎「山部歌津子『蕃人ライサ』解説」、p.3。なお、『闇を貫く』(『東京朝日新聞』1930.6.22-10.25)の主人公「山部加津子」はキリスト教者であり、「ヴァツサー大学」への留学を勧められるほど英語を解し、新聞記者や教師などを勤めるという大変な才媛として描かれている。

19) 杉捷夫「解説 メリメ」『世界文学全集12 フローベール メリメ』河出書房、1962、pp.552-558。

では、これまで台湾文学研究では注目されてこなかった沖野岩三郎(1876～1956)とはどんな人物であろうか。1876年、和歌山県日高郡に私生児として生まれた沖野は、師範学校卒業後、小学校校長を務めていたが、1901年キリスト教の教えに出会う。和歌山教会で受洗の後、伝道者を志して1903年には明治学院神学部に入學、同級生には賀川豊彦がいた。在学中より和歌山県新宮教会に派遣され、医師大石誠之助と親交を持つ。新宮教会は大石の兄・余平の建てたものであった。1910年の大逆事件によって大石誠之助は絞首刑となり、沖野も取り調べを受けるが嫌疑を免れる。1917年、大逆事件を題材とした長篇小説「宿命」が大阪朝日新聞懸賞小説の二等に当選、以後作家としての活躍を始め、生涯に40冊を超える著書を残している。また1943年に軽井沢に教会を開き、戦後は日本キリスト教団の牧師に復帰している²⁰⁾。つまり、社会主義的傾向を持つキリスト教伝道者であると同時に、大衆文学作家でもある、という非常に興味深い人物であると言えるだろう。

では、『蕃人ライサ』に含まれている沖野岩三郎だからこそ書き得る内容とは何であろうか？ まずは井上伊之助(1882-1966)との関係である。井上は高知の生れ、キリスト教伝道者を志し聖書学院で学んでいた1906年に、台湾で樟脳製造に携わっていた父・弥之助を原住民族に殺害され、それを契機に台湾での伝道を志した人物である²¹⁾。下村も指摘しているように、『蕃人ライサ』はその構想の多くを井上の『生蕃記』(1926)に負っている²²⁾。まずはライサとお六の見合いのエピソードは『生蕃記』所収の「ミカの悪夢」と重なる点が多い。主人公のミカが日本語が堪能で、日本人の役人に重宝がられていたこと、巡査補となったこと、さらには父母が「刺墨」をして同族の女性との結婚を勧めたが、日本教育を受けた本人は嫌がったことなどもほぼ同様である²³⁾。さらに、田中が馘首されてしまうことや、

20) 沖野に関する記載は主として沖野の孫に当たる関根進『大逆事件異聞 大正靈戦紀 沖野岩三郎伝』書齋屋、2008を参照にした。

21) 春山明哲『近代日本と台湾 霧社事件・植民地統治政策の研究』藤原書店、2008、pp.126-152。なお、春山氏には国会図書館所蔵のマイクロ資料『生蕃記』では欠頁となっている「ミカの悪夢」の資料提供を受けた。ここに記して謝意とする。

22) 前掲、下村作次郎「山部歌津子『蕃人ライサ』解説」。

23) 但し、「ミカの悪夢」において、日本人がミカに勧めたのは日本人ではなく本島人(漢族)売春婦であり、ミカは一度は彼女と結婚した後別れている点は、『蕃人ライサ』と異なっている。

その息子の胖が神学生であり、父の死を契機に台湾に伝道に向かう点も、井上自身の経歴と重なる。『蕃人ライサ』におけるカラパイ蕃社の反乱の理由が『生蕃記』に書かれた父・弥之助殺害の経緯と同じであることはすでに下村が同書解説で指摘している通りであるが、田中が高知出身で「土佐」と綽名されているところなども、田中が弥之助をモデルとしていることを強く窺わせる。沖野と井上が交友関係にあったことは、『蕃人ライサ』の「はしがき」の中で沖野自身が書いている他、戦後刊行された『台湾山地伝道記』に代表的な「蕃社の曙」読後感として「明治三十八年以來の信仰の友」として沖野の書簡の一部が引用されていることから明白である²⁴⁾。沖野が旧友井上の『生蕃記』に刺激を受け、井上の台湾での経験を生かし、井上父子をモデルとした作品を書こうとしても不思議はない。

また井上にとってもライサ像は満足のいくものであったらしい。井上は1933年1月の雑誌『台湾教育』に「蕃山(やま)の青年—特にタイヤル族の若人に就いて」という一文を発表している²⁵⁾。その中で「『蕃人ライサ』中に現はれたタイヤル族の青年ライサは実に吾々の理想である、多数のタイヤル族青年中には斯る実在者がある可きである。参考の為に転載しておく」として、「読書と実験に没頭」(p.93)し、「化学の実験だけは私たち生蕃の若者がやつても、大学教授の博士がやつても、ちつとも違はない結果が現れるんですもの」(p.94)と述べる部分を3段にわたって引用している²⁶⁾。『蕃人ライサ』は同じく伝道を志した「明治三十八年以來の信仰の友」である沖野と井上の関係があってこそ生まれた作品であると言えるのではないだろうか。

24) 沖野岩三郎「感激の書」井上伊之助先生著作刊行会『台湾山地伝道記』新教出版社、1960、pp.288-289。沖野は「これ(蕃社の曙)を読んでいるうちに思い出したのは「蕃人ライサ」のことです。あれは友人の岡部節子さんにわたしが材料を与えて書かせたものですと書いており、この記述が下村の山部歌津子＝岡部節子説の根拠となるものであるが、「山部歌津子さんが訪ねて来て、大部な原稿を示された」とする「はしがき」の記述とは矛盾している。

25) 井上伊之助「蕃山の青年—特にタイヤル族の若人に就いて」『台湾教育』366期、1933年1月、pp.137-140。

26) 引用箇所はゆまに版の91頁5-13行、92頁8-93頁3行、93頁7-12行、94頁8-9行。微妙に表現が違う点もあり、興味深い。なお、引用箇所に登場する山本医師も、伝道を許されず医務嘱託として山地に入った井上をモデルとしているのではないかと思われる。

次に注目したいのは、『蕃人ライサ』には娼婦になってしまった原住民族女性のエピソードが「蕃女哀話の一つとして、当時渡台した有名な詩人的小説家加藤氏によつて「週刊日本」誌上に紹介せられ、単に台湾在住の人々の間だけでなく内地でさへ知れ渡つてゐる事がらであつた。殊に月明の夜、加藤氏の宿舍へ、ラゴオピンが口に含んで舌で鳴らす笛を合図に遊びに来る所などは、評判になつたものであつた。」(p.144)と挿入されている点である。この加藤氏とは明らかに佐藤春夫のことであり、実際佐藤は1925年に『改造』に発表した「霧社」において、「綿打ちの絃の響のやうな音」を鳴らす「売笑婦」の姿を描いている²⁷⁾。佐藤は沖野が伝道に派遣された新宮の出身であり、1906年、沖野と大石誠之助が与謝野寛を招いて文芸講演会を開催した際には、演壇に立ち、新宮中学を停学処分となっている。また誠之助の兄、余平の息子である西村伊作(文化学院の創設者)を交えて、沖野・佐藤の交友は続き、沖野の著作『煉瓦の雨』(1918)には佐藤が跋文を寄せている²⁸⁾。前述の引用箇所に見られる佐藤をからかうような表現は、年長の友人である沖野であるが故のものであり、無名の女性作家「山部歌津子」に書けるものではあるまい。また、「シベリアお六」という日本人元娼婦も、『娼婦解放哀話』(1930)を執筆したばかりの沖野なればこそ、と思われる人物造形であることを付け加えておこう²⁹⁾。

さて、以上考察してきたように状況証拠は「山部歌津子」=沖野を示唆しているように思えるが、では仮にそうとして、何故沖野は「山部歌津子」名で『蕃人ライサ』を刊行しなければならなかったのだろうか？これはあくまでも推論であるが、同書のほとんど最後の場面に挿入的に書かれた霧社事件の描写が関係しているのではないだろうか？カラパイ蕃社の反乱によって殺害された田中の息子胖は、「僕は聖書一卷を掲げて、彼等蕃人の中に入り込み、たとひ、如何なる理由にしろ、人が人を殺すことの悪事であることを知らしめなければ已まない決心をした。僕はもう断然決心した。伝道！これが僕の復讐なのだ敵討ちなのだ」(p.350)として、台湾に赴く。その「台湾への途次、蕃社反乱事件の其の後の情報を段々に新

27) 佐藤春夫『霧社』昭森社、1936、p.163(初出は『改造』1925.3)。但し、引用に際しては河原功監修『日本植民地文学精選集【台湾編】5 佐藤春夫 霧社』ゆまに書房、2000を使用した。

28) 前掲、関根進、pp.301-303。

29) 沖野岩三郎『娼婦解放哀話』中央公論社、1930。

聞でも見、人の噂でも耳にした。殊に神戸から基隆への汽船の三等室では、殆んどその話で持ち切りだつた」(p.351)として、以下の記述がなされている。

僅か五百に足らぬ生蕃討伐のために二個連隊の軍隊が出動したとか、甚だしきは屏東から三台の陸軍飛行機は討伐軍に参加して、最近完成した陸軍化学研究所自慢の毒瓦斯が、機上から蕃社に日夜を分たず投下せられつつあるとか、其の白木蓮の花に似た色の毒煙が、細かい霧になつて散り広がり、その触れる所、立木も草も真黒に縮んで、蟻一匹もおよそ命のあるものは悉く斃されてしまふのだといふやうな話を、見て来たやうに誠しやかにしやべつて聞かせてゐる男もあつた。(p.351-352)

河原功はこの描写に対して、「この書の上梓に時期といい、軍隊の出動、三機の飛行機、毒ガスの使用といったことからして、これが霧社蜂起事件以外の何ものでもないことは明白なことである」と述べている³⁰⁾。では、最初から『蕃人ライサ』は霧社事件に刺激を受けて執筆されたのであろうか？ 断定はできないが、同書の刊行が1931年1月であることを考えれば、1930年10月27日に霧社事件が起こった後に353頁にも及ぶ長篇小説を構想し、執筆し、刊行したというのはまず考えられない。井上の父を思わせる田中が原住民族に殺害され、息子が伝道のために台湾に向かう、というストーリーは霧社事件の起こる前から構想されており、ちょうど執筆の過程で霧社事件が起こったために、最後に挿入的にその「噂」を書きこんだ、とする方が自然ではないかと思われる。そして、もしこのタイミングで毒ガス使用の噂も書きこんだ『蕃人ライサ』が沖野名によって刊行されたら、どうなただろうか？ 20年前とは言え、大逆事件の嫌疑をかけられたこともある沖野である。本名での刊行には慎重になった、と考え得るのではないだろうか。

作者「山部歌津子」の謎解きに字数をかけすぎてしまったが、「文明人の頭脳と蕃人の信仰、肉体を以てこの台湾の原始林中に君の天地を創造するんだ」(p.73)という新しい「蕃人」像が、沖野岩三郎、井上伊之助という、従来の台湾の日本語文学ではほとんど顧みられることのなかったキリスト教伝道者たちの連携によって描かれたことは、大いに注目すべき点であると思われる。特に沖野岩三郎

30) 前掲、河原功、pp.87-89。

は台湾のメディアである『台南新報』に1931年末から翌年6月21日まで『蒼白き貞操』という長篇小説を連載している³¹⁾。沖野と台湾の繋がりについては今後一層の研究が必要とされるであろう。

V. まとめ

以上、大鹿卓『野蛮人』、谷崎潤一郎『武州公秘話』、山部歌津子『蕃人ライサ』という1930年代に書かれた三作品を中心に、1930年に起こった霧社事件報道により強化された台湾原住民族 = 「野蛮」という言説と対立しながら、各作家が如何に「野蛮」を捉え、それをむしろ自己内部の問題として共鳴を語ってきたか、ということ論じて来た。

谷崎の問題はひとまず脇に置くとして、最後に、直接的に台湾原住民族を描こうとした『野蛮人』、『蕃人ライサ』、さらには津島佑子『あまりに野蛮な』に一つの疑問を呈してまとめに代えたい。

これら三つのテキストが、原住民族表象を「植民地台湾に対する野蛮未開の想像を可視化するための触媒」(楊智景)としてのみ機能させていた数多の粗雑なエクリチュールの中で、屹立した成果を示したものであることは間違いあるまい。だからこそ、前述のように研究者は「日本と台湾が持っていたそれぞれ異なる「台湾植民地像」は、実際にオーバーラップしているという可能性」(呉佩珍)や「日本の理蕃政策および霧社事件への批判」(河原功)、「「日本」=「文明国」/「蕃人」=「野蛮な種族」といった、両者の絶対的な関係を解体しようとする異色の作品」(李文如)を読み取り、高く評価するのである。ただ、かつてレオ・チンは全国大衆党の河上丈太郎・河野密が台湾民衆党の協力により調査執筆した霧社事件告発レポート「霧社事件の真相を語る」(『改造』1931.3)を分析、「河野と河上は彼

31) 高木建夫『新聞小説史年表』(国書刊行会、1987初版、1996新装版)に拠れば「昭和6年11月7日-7年3月」となっているが、昭和6年の『台南新報』の現存は確認できていないため、未確認である。現存する昭和7年では1月4日45回-6月21日187回まで連載が続いている。なお、野口存弥『沖野岩三郎』踏靑社、1989および前掲関根に『台湾新報』とあるのは『台南新報』の間違いである。『台南新報』の調査に当たっては政治大学台湾文学研究所羅詩雲氏の協力を得た。

らが告発した総督府の植民地的中傷の裏面を、原住民の感傷的理想化という形で、再生産している」と同時に、文明 / 未開、支配 / 被支配という植民地的差異によって知識のモードが限定されている彼らには、感傷的理想化に「注意する」ことすら「思考不可能」であったのだ、と論じたが、その批判はこれらのテキストにも当てはまりはしないだろうか？「自分の領分を失なったミーチャはモーナ・ルーダオに身を寄せずにいられなかった」(上342)としても、田沢が「野蛮人」となって蕃社の「男」、老頭目のイバンタイモの「息子」としてのアイデンティティを再獲得したとしとしても、それは「文明 / 未開、支配 / 被支配」の構造自体を揺るがせるものではなく、植民地的差異を再生産しているだけではないのだろうか？³²⁾ それが本稿の執筆中、決して消えることのなかった呪詛とも言うべき疑問であった。では一体どのような方策があるのかと絶望しつつも書き続けた本稿ではあるが、高麗大学におけるシンポジウムを契機として新たな地平が垣間見えることを期待して、答えは空白のままに提出しようと思う。

32) レオ・チン(長谷川健治訳)『思考不可能性としての霧社事件—植民地性、原住民性と植民地的差異の認識』呉密察・黄英哲・垂水千恵編『記憶する台湾—帝国との相剋』東京大学出版会、2005、pp.103-129。なお、前掲『文学から見た台湾の記憶 / 記憶の台湾—1930年代を中心に』(企画責任者：李文如、座長：呉佩珍)において発表されたRobert Tierney “The Politics of Primitivism: Representing the Musha Incident in Japanese Literature”にも「大鹿の提案する殖民制度の改革は文明と野蛮のヒエラルキーそのものに手をつけなくて、殖民と被殖民の力関係を維持する皮肉な結果を齎している」という指摘がある。